



豊かな大地で、自らの手で育んだものを、自然への感謝を込めて収穫する。その何物にも代えがたい喜びに、思わず笑みがこぼれます。



最先端の技術で高品質の製品を——。恵まれた自然環境と、人に優しくゆとりある職場環境が、まちに蒔いた新しい産業の種を大きく育てています。



楽しく快適にショッピング。より安く豊富な品揃えとともに、訪れるとワクワクするようなアメニティ空間を演出。21世紀の商店経営をめざしています。



長沼の清らかな水——そんな恵まれた自然をいかした特産品が、毎日生み出されています。長沼ならではのもの。それは未来へ伝えたい、まちの誇りです。



爽やかな緑の風の中、かるやかに歩む生徒たち。若い力に秘められた、明日の可能性は無限です。その一人ひとりがまちの未来を輝かせていきます。

野の草花が萌え出す春とともに、土を耕し、種を蒔き、人々に豊かな実りをもたらしてきた農業。それがいま、大きな転機を迎えている。常に長沼の基幹産業であり続けた農業が、これからも町を支える確かな力であり続けるためには、様々な課題がある。

「農業にとっぴりとつかっている、内側の目だけで考えているのは、問題が見えません。」

——いわせキユウリのブランドで知られるキユウリの周年出荷を実施している池田さんは熱く語る。「はた目から見て、農業は魅力があるのか。そんな『外側の目』をもつことが、農業への関心につながるんですよ。」

実際、池田さんの携わるキユウリ栽培には、多くの若い人達が従事している。それはなぜか。キユウリは現在、露地栽培のほか、ハウス栽培、加温栽培も行っている。これによりシーズンを通じた収穫の安定性をもたらし、それが安定した収入につながっている。また、市場の動きを読み、「一番高い時期に、最高の



ものを提供する」ことにより生み出す高収益……。このように、農業の魅力を確かな形にして見せること。それが、若い人がついてくる大きな要因になるのだという。

機械の大型化や作業の委託。これらも、将来の農業経営を語る上で、クリアしなければならぬ大きなハードルだ。栗野さんも、そんな課題に取り組む一人。「省力化、労働時間の短縮、これらは時代の流れです。しかし、もちろん機械は高額ですから、『コストとの相談』という問題にぶつかるとは。一人ひとりの考え方には、それぞれ違いがある。それをどうやって共通の認識と理解を得て進めていくか、そこに将来のカギがあると、栗野さんは語る。

そして農業とは、家庭があつてこそそのもの。「女性の目」から見た、長沼の農業はどうだろう。「実際に自分でやってみると大変。でも、自分の手がけた作物が収穫できたときの気持ちは格別なんです」と、目を輝かせるの

は、長沼町内から嫁いできた横川さん。どんな作物も、朝のとりたては甘さが違う。そんなことも、農家の主婦となつて初めて実感できたような気がする、という横川さんは、栗野さんや池田さんの奥さんともみんな友達。そんな女性同士のつながり、ネットワークは心強く、必要不可欠なものだという。

そして全員が口を揃えるのは、「楽しい農業をしていきたい」ということ。「農業は、やってみると面白い。だからまず、みんなにも『やってみようか』と思ってもらおうこと。これが一番大切だし、自分たちの大きな役割だと思っんです。」それは、家庭でそういう意識を育てることも大事だし、もつと大きな目で見つて、『地域全体』で後継者を育てる雰囲気、下地づくりをすることも大切。それには、まず自分たちがイキイキと楽しく農業をやっている、そんな姿を見せることが、その出発点——。そんな熱い思いに育まれ、長沼の農業は、豊かな未来へと歩いていくことだろう。